

地域に溶け込んで活動を続ける、甲州市の「コロボックル」とかつぬま朝市。今後の運営には課題も見えている。
かつぬま朝市を取り仕切ってきたのは、高安一と小沢正光の2人。運営への協力者は徐々に増えってきたが、朝市の規模はそれを回るペースで拡大してきた。
多いときで150店。商工会や実行委員会が中心になって行っている全国各地の朝市に比べても遜色ない規模だ。高安も小沢も仕事をして一家を支える身。負担は小さくなっている。
運営組織はどうするか。朝市を担う次世代をどう育成するか。高安たちの思いを引き継いで、活動していくのが役立つのが、朝市のウエブサイトだ。
最初は朝市を周知する

「コロボックル」「かつぬま朝市」運営の課題

規模拡大で主催者負担増 定着へ次世代の育成力ギ

悪いことも記録されてしまう。期せずして、「トライアンドエラー」も糸余曲折も、追体験できる「データベース」になった。老若男女が集まる市。子どもたちがおもちゃを売る店もある。「子どもたちが成長して大人になっても、『おらが朝市』として続いてほしい」と願う高安。いま、持続のための人間関係づくりを考えている。

△

「コロボックル」は榎原雅樹らが人脉を生かしながら、もうすぐ喜寿を迎える76歳の佐橋は人材の育成も担う。コロボックルには30歳の樋山太一、27歳の鶴岡舞子ら若手が参加している。

2人に目をかけ、アドバイスもする佐橋は「彼らが専門性を身に付けて地域に貢献することで、彼ら自身も、そしてコロボックルも地域社会で認められる『本物』の存在になれる。そのために、自分ができることがあってあげたい」と話している。

ために始めたサイト、更新の頻度が少ないなど、検索ページで目立つ上位に来ない。「毎日更新」を心掛けて始めたが、なかなか失敗談や裏話をどんどん記事化した。「お情け頂戴でも来場者が増えればいい」というつもりだつた。たった「エココン」などを手掛けた林間仕事室の紹介などを行なってきました。

ただ、「林業の衰退など地域が抱える問題は、イバントだけでは解決しない」と、相談役の佐橋橋二は言う。一過性ではなく、日常的な取り組みとして定着させることが必要、と考えて

「コミュニティーカフェ」の要素は…



談話室コロボックルには、さまざまな人が集う。広瀬健（左から2人目）らスタッフは、来店した人の話にじっくりと耳を傾けて情報を集め、時には興味や問題意識が近い来店客同士を結び付けることもある
—岡田伸也撮影=朝日新聞社

「夢実現のスタート地点に

森林、農業、地域活性化。コロボックルを拠点にして結び付いた人が、カフェの外で活動を始めることがある。柳原は訪れる人の関心によって、カフェでの話題や活動の切り口が変わることもある。カフェがそんな幅の広い場になっていくことを考えている」と語る。

「おれんどうの孫の代のために、将来は…。」コービー一片手に会話をしながら「みんなの将来像」を共有できる場であり、実現に向けて一步を踏み出すステップ地点もある。目指すカフェは、そんな空間だ。

桜原雅樹や白瀬健らスタッフは、頻繁に会話を交わす。話題の中心は、どんな客が来たか。「さつきの人は農業に興味がある」「あの人と結び付けてみたら面白いかも」

スタッフは来店者のことを知ろうと、話し掛ける。会話の内容や店内のラックから選んだチラシから、興味や問題意識も見る。

すけっこ流儀

第3部 地域に元気を

「すけっこ」の流儀 第3部地域に元気を」では、甲州市塩山上於曾でコミュニティーカフェを運営するNPO法人「エロボックル」と、同市勝沼町勝沼で月に1度立つ「かつぬま朝市」を取材した。カフェと朝市を舞台に、互いを必要とする人と情報が出会い、甲州弁で人と人の助け合いを意味する「すけっこ」が生まれるまでの過程を探った。〈企画取材班〉

ル」、市と名の付く「かつぬま朝市」。だが、それぞれの場での主な目的は、喫茶やモノの売り買いでない。人の集いの場となり、交流によって地域に元気を与える

① アクセスの
しやすさ

運営開始から2年が経過した「



子どもからお年寄りまでが行き交うかつぬま朝市の会場。「自己発表のステージ」「生きかいの場」となるブースでは、出店者と来場者の間に笑顔が広がる

間口広げ、楽しみ集う場に
喜びも不安も「思い」共有

集いの場にしたい」と、当初は店を閉じて周知やイベントへの参加を優先した結果、皮肉にも地域でカフェが「開いていない」とみられてしまつた。利用者の声を参考に、運営方針を「どんなときでも開ける」に転換。カフェは以前より人も情報が集まる場に変わつていつた。

一方、市は当初、出店者にとって間口が狭かつた。市を取り仕切る高安一(48)や小沢正光(59)に「朝市と言えば生鮮品」といふ先入観があり、方針に沿う商品ばかりに目が向いていたためだ。「何でもOK」にかじを切つてからは、楽しみながら集える成される共同体意識。困り事とも

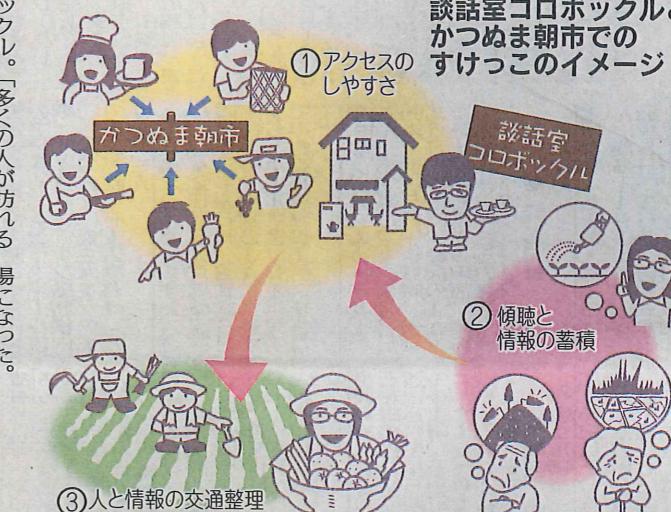
② 傾聴と
情報の蓄積

「何があつても、店は開ける」ことになったコロボックル。3月11日の東日本大震災後には、停電の中でテープルにろうそくを立てて店を開き、地域の人たちが互いの不安を打ち明けた。店を運営するNPO法人理事長の榎原雅樹(40)や店長の広瀬健(30)は、カフェを訪れた人たちの声に耳を傾ける。初めは建前だけだった話に、「本音」が滲びていく。

問題意識と共にすることで、活動はカフエの外へと広がっていく。
(3) 人と情報の交通整理
カフエや市を行き交う人々の技術や経験、地域資源などの情報は、それを必要とする人と出合わなければ役に立たない。誰が人と情報を引き合わせるのか。コロボックルでは榎原や相談役の佐橋二(76)たちが、朝市では高安や小沢たちが“交通整理”的役割を担つている。
エコロジーと婚活を組み合わせた「エココモン」を企画した榎原山太(一30)に間伐ができる森林の情報を提供したのも、被災地に送る野菜を生産するための耕作放棄地の情報を集まつたのも、コロボックルだった。榎原や佐橋が間伐や耕作が「できる人」と「してほしい人」を組み合わせることで、利用価値が低下していた森林や田畠などをどの地域資源がよみがえった。
朝市では、人と人とのマッチングが実現している。高安と小沢は毎回、出店者から話を聞いて情報を整理する。手助けが必要な人や困りごとを抱えている人には、別の出店者を紹介。さらに、地域に埋もれている人を市場に引き出すことにも力を入れてきた。
竹かごを市に出す内藤裕(77)もその一人。ほそぼそと営んできた竹細工の技術の見せ場が用意されたことで、内藤にとっては朝市が「出番」や「生きがい」の場になつた。

人と情報の出会い活気生む

① 談話室コロボックルと
かつぬま朝市での
すけつこのイメージ



③人と情報の
交通整理